

高架展望デッキのある新しい駅前たまり場

(背景)

九州のJR、私鉄とも全国例と同様にターミナル駅改札口の高架化が進んでいる。そのために従来のように駅前広場のような機能を果たす空間がなくなっている。老若男女が待ち合わせをしたり、おしゃべりを楽しめたりした空間はまちづくりに貴重であった。高架にしたあとすぐに線路に沿うようにして道路があればこちら側歩道に降ろすか、高架の改札口から向こう側の歩道に従来の細い通路のような歩道橋でつなげるケースが増えていて味気ない。

(内容・効果)

高架改札口につなげる形でデッキ型の歩道橋を設ける。デッキは駅前道路やバスターミナル、タクシー乗り場を跨いだり、それらの屋根となる形で幅広の余裕スペースを確保しながら向こう側に階段の足を降ろす。商業ビルがあればデッキのままの形で幅広につなげる。そしてデッキにはベンチやシンボルとなる彫刻などを置き市民憩いのスペースとなるようにする。

乗降客やここに憩う人たちがデッキから道路を見通しながら商店街や並木などをながめ、新たなまちづくりを考えるきっかけになるほか、駅前が再びまちのたまり場としてにぎやかさを呼ぶ。

人がデッキを通して行き来したり回遊したりするまちのコンセプトとして「ループシティ」を掲げ話のついたところから取り組みを進めたい。「ループ」は「ループ (回る)」と「ピープル (人々)」の合成語である。